
真逆の二人

神羅 リリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真逆の二人

【Nコード】

N2171C

【作者名】

神羅 リリ

【あらすじ】

あたしのクラスには、有名な『真逆の二人』がいる。二人がどうして真逆の二人と言われているか…それは、『成績トップの生徒会長と成績最下位の野球バカ』それだけじゃない。モテる生徒会長とモテない野球バカ…あたしは中田に惹かれてる。でも中田は…

第一章 真逆の二人（前書き）

性的表現、悲哀などの表現があります。

苦手な方は読むのを辞めてください。

すべて自己責任でお願いします。

第一章 真逆の二人

あたしのクラスには
有名な二人がおる。

そいつら、

仲は良いのに

性格が真逆やねん

いつまでも君に。

「今日の授業はここまで。もうすぐテストだから、家に帰ったらしっかり勉強しとけよ」

今日も毎日のように学校が終わる。

トイレに行っとして

遅れたあたしは放課後、鞆に荷物を詰めて教室を出る。

鍵も閉める。

その時

「ちょっと、まだ鍵閉めんとって!!」

そう私に言いながら廊下を急いで走ってきた奴の名前は

中田 健十

(ナカタ ケント)

『有名な二人』のうちの一人だ。

「はあ…はあ…まだ…鍵閉めて…ないやんな…？」

「今閉めようとしたとこ」

中田、息切れしながら喋るとる…。

めっちゃ走ったんかな…

「待つて待つて！俺まだ教室に荷物置いたままやねん！」

中田はそう言って教室にある自分の荷物を背負って教室から出て来た。

「廊下全力疾走したら、ばり疲れたあゝ！荷物も重いしゝ」

「中田、部活は？」

職員室に教室の鍵を返しに行くのを中田が着いてきた。
中田は野球部。

「今日はない！もうすぐテストやからなー」

もう疲れが取れたらしい…
さすが運動部。

「じゃあもう家帰るん？」

「そつやあ〜！勉強なんかせーへんけどな！」

そう言いながらニコって笑う中田の顔が、
なんとなくめっちゃ好きやった。

実は前から

元気で悩みの無い明るい中田に
あたしは惹かれとった。

「でもほんま俺、勉強せなアカンなあ〜。叶佑にも言われたし〜」

「そりゃあ中田が勉強しなさすぎだから、親友として心配しとんや
ろ」

あたしらが言う『叶佑』とは

戸田 叶佑

(トダ キョウスケ)

真逆の二人のうちの最後の一人だ。

「あいつは勉強できるもんなあ〜」

「教えてもらったらいいじゃん」

「あゝむりむり！あいつ、教えるのとかあかん奴やから！」

中田は手を振りながら苦笑いしとった。

自分はいいつとは釣り合わんから

とでも言うみたいだに、自分より戸田を上にあげとる。

戸田は生徒会長。

中田には当然、頭の上がない相手だ。

もちろん戸田も、中田なんて相手にしてない。

そんな二人が

『真逆の二人』

言われとるのは

二人の事見とつたら分かる。

成績トップの生徒会長と
成績最下位の野球バカ。

第二章 願望

モテる戸田と

モテない中田

あたしは考えていた。

モテる戸田ならまだしも、なんで中田に惚れてるんやろ…

高校に入学したばかりの時は
戸田の方に一目惚れしていた。

自分を信じとる
という目がめっちゃ
かっこよかったから。

「そついえば澤尻の噂回ってんだけど」

澤尻、それはあたしの名前。

澤尻 茜

(サワジリ アカネ)

「あたしの噂？何？」

中田は少し不思議な顔をしながら

「澤尻、スキな奴おる？」

と、聞いてきた。

スキな人に…
聞かれた

「おるけど…」

「え?!マジで!?実はな、テストが終わったからお前がスキな奴に告る(告白する)とか噂回ってたで!」

中田はあたしにスキな人がいることに半分驚いたけどその反面の顔、ニコニコしとる。

「告白なんか、せーへんって!」

「マジでー 楽しみやったのに」

実は噂は本当の話。

親友の加奈(橋本加奈)が喋ったんやろ…

あたしはテストで賭けとる。

順位が低かったら告る。

自分の罰ゲームみたいなもん。

つられる事ぐらい、分かるとるから
…

「噂が本間やったとしたら、澤尻、誰に告ったん？」

「さあね〜！」

あたしは指先で鍵をくるくる回していた。

「もしかして、叶佑…とか？」

中田は自信があるようだった。

「…違っつて〜！」

あたしはちょっと苦笑いした。

あたしが昔、戸田の事好きやったのを中田は知っとる。

「違っんか〜でもそらそうやんな！だっってお前、フラれたもんな〜」

そう、あたしは戸田に一回フラれた。

戸田が中田に相談してたのが、それを中田が知っていて、

ずっとあたしを励ましてくれていた。

「戸田、女とか興味無さそうやなあ〜」

あいつに彼女が出来たなんて一度も聞いた事がなかった。

「叶佑な〜。一回だけ、おってんけどな〜！」

「え?!」

あいつに…元カノ?!

「だ…誰にもゆうなよ?!俺しか知らへんねんからな!」

中田はめっちゃくちゃ焦った。

多分かなり強く口止めされたはずやわ……。

「それで?誰なん?!あいつの元カノ!」

興味はなかったが
一応聞いてみた

ら…

「水城さんらしいで〜」

よりによってあたしのライバルやった。

水城 奈美

(ミズキ ナミ)

奈美も中田を狙っている。

「奈美があゝ意外やな!どうやって戸田の事落としたんやろ…怖」

あたしはよそ見をしながら言った。

奈美はカワイイから、モテる事ぐらい分かるとる。

でも、戸田まで落とすとは思わなかった。

あたしの顔は、ケロっとしているが、内心とても驚いている。

「でも叶佑、水城さんの事好きじゃなかったで!」

中田は上を向いていた。

「じゃあなんで付き合っねん!」

あたしは中田がさつきから意味の分からない事を言っのが気に入わ
なかつた。

「叶佑、水城さんに騙されてん。」

「え…:？」

なんだか急に怖くなった。

「騙されたらってゆうか『私と付き合ってくれたら…』ってやつ！
」！

ああ。『なにかしてくれたら私もなにかしてあげる』作戦な。

奈美らしい。

「『私と付き合ってくれたら』の続きは？」

中田は一度、考えるような顔をした。

「『私と付き合ってくれたら、』……………」

「なんなん？」

「……………お前、叶佑にフられてから水城さんと何かあったやろ？」

続きを言わず、中田は話を変えた。

あたしは

気持ちを押しさえて

中田の質問に答えた。

「戸田にフられてから、奈美がよく喋りかけてきた」

あたしが戸田にフられたから、気分が良かったに違わん。

あいつは最低な女やもん…

「あんな…俺、言っていていいか分からんけど…」

「なに？」

「水城さんな…」わたしと付き合ったら、もう貴方があの人に付きまわれないうちにしたる』って、叶佑に言ってる」

『あの人』

あたしに決まっとる。

…奈美らしいわ、その無責任さってゆうかさ

平気で人を傷つけるとこ」。

戸田も戸田だよ。

あたしをうつとうつしいと思ってたんやな…

「あたし、めっちゃ奈美と戸田に嫌われとるやーん」

あたしは、強がりだってよく言われる。

絶対泣かない、泣いたら負け

そう思っ生きてきた。

今は悔しい気持ちでいっぱいだった。

でも中田にはバレないようにしてる。

負けたくない、負けたくない、

あいつなんか

奈美なんかには負けたくない。

絶対中田はあたしが振り向かせてやる！！

「叶佑が澤尻の事、キライやと思う？」

中田の突然の質問だった。

答えたりできなかった。
ただ悔しくて…

その時、

「健十、お前何やっとなねん。帰るんちゃうんか？早よせえ」

職員室の前で戸田が中田を待っていた。

「叶佑！待ってくれとったん？！もう帰ったと思うとったわ！」

「お前と一緒に帰る言つたんちゃうんか」

戸田は待たされて機嫌が悪いみたいだ。

「メンゴメンゴ！澤尻の話がおもしろいから長なってもた！」

中田は走って戸田のもとへ近付いた。

あたしは、あたしを見て何か言いたそうな戸田を無視し、職員室に鍵を担任の先生に渡しに行った。

戸田とは喋る事なんかないし、喋りたくない。

「新谷先生、遅くなってすみません」

先生は職員室の隅でたばこを吸っていた。

「おお茜、お前最後か。ご苦労さん」

あたしの担任、新谷先生はまだ若い。

外見も悪くはない

案外、生徒に交際を求められるほどモテている。

「失礼しましたー」

「なあ茜、」

「はい？」

先生は教室を出ようとしたあたしを呼び止めた。

「……………」

「先生？どないしたん？」

先生は黙っていた。

「…帰りますよ？」

先生が何も言わんから

あたしは教室を出ようとした。

「待てや茜、」

「なんですか？」

「…いや、ええわ」

「用、無いんですか」

「おう、無いわ」

やっと喋ったと思ったら…

あたしは不思議に思いながら、

「失礼しました」と言って職員室を出た。

そしたら、

「おい澤尻」

あたしの名前を呼んだんは

「…戸田、まだ居たんだ」

そう、戸田やった。

「中田は？一緒に帰るんやろ？待たしていいん？」

あたしは目を合わさなかった。

なぜ声を掛けられたのかさえ、分からなかった。

あたしはびっくりしていた。

「健十は靴箱で待つとる」

「待たせたらあかんで」

早く帰りたい。

早くどっかに行ってほしい。

「……久しぶりに喋らん？」

突然やった。

「え？」

意外な発言やった。

「お前も一緒に帰る。」

聞き返せへん

言葉やった。

Side・中田 健十

「ごめん、待たせた」

叶佑は靴箱で待った俺に謝った。

「遅いわ！！まあええけど！」

俺は口を尖らせている。

怒ってはない。ただ、叶佑に謝られたら恥ずかしいから。

「帰るか」

「おう！」

部活が無い日は、絶対二人で帰る。

校門を出て、始めに口を開けたのは叶佑やった。

「なあ健十、」

「なんやー叶佑」

俺は歩きながらバットを磨いとる。

せやから叶佑の顔が見える方向は逆。

それでも構わずって口調で喋る叶佑。
ってゆうか、逆にそっちの方がええらしい。

「俺な、さっき…澤尻と一緒に帰ろって言うてん」

「…そうなん…って、え?!お前が?!なんでやねん?!」

まじでびっくりした。

こいつが帰るんに女の子誘うなんか…しかも相手が澤尻って!!

「それで…肝心な澤尻は？」

誘ったんはええ（いやええんかは分からん）けど、一緒に帰ってへんやん！

「あいつ、俺の事イヤ…って。」

「え?!」

澤尻が叶佑をイヤがった?!

バットばかり見ていた俺が、せつかく叶佑の方を向いたのに、叶佑は顔を見せんかった。

「あいつ、誰かに告るんやろ？」

叶佑は話を変えやすい。

でも澤尻の話やったらめっちゃ続く。

「あー、でも澤尻、誰かに告る事否定しとった。」

俺は鼻を噉った。

最近、澤尻や叶佑が何を考えとるかが分からんくなってきた…

それは親友として、めっちゃ悲しい事でもある。

「俺、澤尻が告ろうとしとる奴分かった。」

「え?!叶佑、まじで?!誰?!」

「さあ?お前は分からんくていいと思う」

「なんでぢねん」

俺はその時、叶佑が俺の事を睨んだのを見逃さなかった。

S i d e · 澤尻 茜

『お前も一緒に帰ろ。』

家に帰り、お風呂に入る、ご飯食べる、寝る…

本当なら爆睡しとるのに

今はあの言葉が頭の中を繰り返し響いとった。

なんで戸田はあんな事言つたんやろ…

『お前も一緒に帰ろ。』

突然やった

『は？何言つとん？！』

あたしどどって

『お前に聞きたい事めっちゃあんなん』

戸田は普通なんかな
あたしはこんなに取り乱しとるのに

『あんたに言う事なんか無いわ!』

よく分からんわ

『お前、好きなんやろ。
健十の事。』

あたしはベットの上でメールをしていた。

ピッ

《受信・加奈》

「テスト勉強まじでだるい
茜は告るんやっけ?! 頑張れ〜」

加奈はあたしが告るのを
めっちゃ楽しみにしてる。

ピッ

《受信・岩村さん》

「聞いて！！今日中田の奴が、授業中に寝てて先生に怒られとった
く！やっぱりアホはアホやな！（笑）」

岩村さんは中田の幼馴染み。

よく中田を見ている。

でも岩村さんは戸田のファンで、中田によく相談している。

ケータイを見ると、もう一件メールが来ていた。

ピシ

《受信》

中
田

中田？！

中田からメールが来るなんて…珍しい

「今日、叶佑に帰り誘われたん？」

「うん 誘われた！」

「なんで断ってん (T|T) 叶佑の事、好きやる???」

「好きじゃないって! (笑)」

中田とのメールは、なぜか自然だった。

会えない時間 声は聞けない、文字だけが見える。

顔の見れない寂しさが本当に中田が好きだと思わせる。

「じゃあ誰が好きなん？」

中田、

「言えるワケないやん！」

好きやで。

「俺、好きな子とか最近できんから、澤尻が羨ましい！」

中田を好きな奴ならおるのにな。

「あたしは今の好きな人の事、めっちゃ好き！」

「だから誰やねん！
てか、澤尻今から会える？」

「大丈夫やで！」

あたしと中田は、よく夜に会ってる。

二人じゃない。加奈とか戸田とか、多くても6人は居た。

「じゃあ、学校の前おるわー」

「……OK」

そう、少なくとも二人じゃなかった。

「ごめん、待った？！」

「待ってへんで！俺も今来た！」

アレ…？

「今日、昼は？」

学校の前には中田しか居なかった。

「皆無理やっつて 今日には二人でいいやん！（笑）」

え？

「中田と…二人？」

初めてやった。

こんなにドキドキした夜。

星が綺麗な夜。

中田と…二人の夜。

「初めてやな〜！夜に女の子と二人で歩くの！」

「そうなん？」

もう夜の9時を回っていた。

あたしたちの家の近くには海がある。

中田とあたしは海沿いを歩いていた。

「俺、澤尻みたいな彼女欲しいわ」

中田が不意をついて言った。

あたしは驚いて、声も出なかった。

「お前って、男のツボに入り込む性格ってゆうか…」

あたしの顔は真っ赤やと思う。
でも隠したりせえへんかった。

暗くて見えへんし、むしろ隠したりしたらバレると思った。

「襲いたくなる感じ（笑）」

「なッ…?!あほか!！」

「嘘やっつて!ははは」

「ぼけ!！」

中田は笑わそうとして冗談で言ったんやろっけど、あたしは中田ならイイと思う。

今、気持ちを伝えたい。

「あかし……好き」

そつだ言っちやえ茜。

「中田が好き」

「え？」

星は輝いてる。

「中田、ずっとあたしの隣におったから……あたしは中田の隣に居らんとあかんねん。中田がおらんと寂しい。」

「澤尻……」

「付き合って……くれへん？」

2年間、言おうとして言えんかった言葉が今
輝く星達に見守られ、
伝える事が出来た。

「俺、澤尻の事しあわせにできんかもしれん」

「……。」

「でもな……」

あたしは黙っていたが、中田は構わず話続けた。

「しあわせにしたいって、思ったかも。」

誰が予測できただろう。

「俺で良かったら、付き合ってください」

中田からの告白なぞして。

「中田……」

「ちやう、俺……健十やから……／＼／」

「健……」

あたしは泣いてしまった。

「なっ……なんで泣くねん……俺何か言ったか？！」

嬉しかった。

「澤尻…好きやからな！俺、絶対幸せにしたるわ！」

「アホ！あたしの名前…、茜や…」

あたしは笑顔で鼻をすすりながら答えた。

中田は少しテレながら

「茜か…／＼／＼カワイイな／＼／」

と、

あたしを抱き締めて言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2171c/>

真逆の二人

2010年11月12日20時13分発行